

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2191100086		
法人名	株式会社 マル若商店		
事業所名	グループホーム 円		
所在地	岐阜県多治見市小名田町3丁目152番地		
自己評価作成日	平成31年2月27日	評価結果市町村受理日	令和1年6月20日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaijokensaku.mhlw.go.jp/21/index.php?action_kouhyou_detail_022_kani=true&JiyosyoCd=2191100086-00&ServiceCd=320&Type=search
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 ぎふ福祉サービス利用者センター ぴーすけっと
所在地	岐阜県各務原市三井北町3丁目7番地 尾関ビル
訪問調査日	平成31年3月14日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

認知症介護の原点は、不可逆的に進行していく認知機能の低下を少しでも遅らせることにあるのだと思います。そのためには、介護者は常に利用者様に密着し、認知症がゆえに表現しきれない、表現できない思いを注意深く読み取る必要があります。最近まで「利用者様の尊厳を大切に」とか「利用者様に寄り添う」とか唱え運営の理念としてきましたが、これらは人として当たり前のことであり、百回唱えても認知症介護には役に立ちません。
 こうしたことから、当施設では2つのスローガンを立てています。
 ①『きのう(Out Put)、きょう(Today)、あした(Tomorrow)』の介護 ②『十人十色、十人一色』の介護
 この2つを指針として職員一同頑張っています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

事業所は、緑の山々に囲まれた静かな住宅地の一角にある。現在、施設長を中心に職員全員で、認知症ケアの原点に立ち返り、新たなスローガンを立て、真摯に向き合いながら、利用者本位のサービス提供を目指して努力している。「きのう・きょう・あした」の介護、「十人十色、十人一色」の介護を指針とし、途切れ無い支援の継続と個性の重視と共に、すべての利用者が尊厳ある存在であると捉え、新生「円」として謙虚に自己評価を行いながら、さらに質の高い利用者サービスの提供に向けて改革に取り組んでいる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価票

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	2つの指針『きのう、きょう、あした』『十人十色、十人一色』を共有すべく、日々議論を重ね実践につなげるよう努力している。	理念の具現化に向け、新たなスローガンを掲げ、施設長、管理者、職員が目標を共有しながら日々努力している。利用者に寄り添い、そこから自立支援の在り方を考えることを基本姿勢とし、情報を共有しながら実践につなげている。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	施設に隣接した公園があり、天気の良い日は散歩を日課としている。その際、ご近所様との交流があり、そのつながりで季節の野菜などをよく届けていただいている。	利用者は、職員と共に周辺を散歩しながら、地域住民と挨拶を交わしている。時に、住民から野菜の差し入れがあったり、相談や問い合わせを受けることも多く、福祉の実態やホームについて、丁寧に説明を行っている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	最近、ご近所さんのご紹介で入居の問い合わせが増えている。認知症介護についての当施設の考え方や姿勢が少しずつみとめられてきたのだと思う。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は十分に機能していない。参加者に広がりがないし、市役所の参加も減ってきている。2ヶ月に1回の開催は、難しい。	行政、家族、医療関係者が参加し運営推進会議を開催している。現状報告や課題点について、話し合っているが、職員減少もあり、定期開催が困難になっている。家族の要望を出来る限り取り入れ、サービス向上に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	高齢福祉課との相談連携は密だと思ふ。	困難事例や空室情報など、行政と日常的に意見交換し、指導を得ている。行政主催の研修会や連絡会議に出席し、利用者サービスにつなげている。また、現場の状況報告や問題を提起し、解決に向けて、意見交換を行っている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	昨年4月の法改正以後、3ヶ月に1回のペースで委員会を開催し勉強会や施設の実情を点検している。	身体拘束を行わないことを利用契約書に明記し、全職員が共通した意識を持って、拘束をしないケアに取り組んでいる。また、研修で学びながら、具体的な場面を想定し、対応方法を話し合っている。委員会を設置し、利用者の心・行動を束縛することなく、寄り添う支援に努めている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	毎月の職員全体会議の場を利用し、確認している。5つの基準のうち、「利用者様自身の合意を得る」ことについては、現実問題として認知症介護の現場では困難なケースが認められる。		

岐阜県 グループホーム円

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	「自立支援」は両刃の剣です。正しく理解し運用することが重要です。 「成年後見制度」はますます重要になってきている。万能システムでないことも確認している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居申込み時、また、入居の契約時は、認知症介護の内容について時間をかけ、非常に丁寧に説明している。 ご家族の不安や疑問へ真摯に向き合うことで、入居後の信頼関係の礎となっている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	主に面会時にご意見をお聞きしている。また、定期的に送付しているケアプランについても率直な意見をお聞きしている。	管理者は、家族の来所時に話を聞く時間を作り、意見や要望の把握に努め、利用者の生活の様子を伝えている。また、運営推進会議の後に行う家族交流の場でも意見交換を行っている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月一度の職員全体会議を活用している。	施設長や管理者が実際のケアに携わったり、見守りを行いながら、職員の意見や要望を聞いている。職員会議でも意見交換を行い、改善に向けた提案については、出来る事から速やかに対処している。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	処遇改善手当を軸に、職員が生きがい・やりがいを持てる職場作りをしてきた。随時の給与見直し・年3回の賞与支給を行っている。また、有給休暇の取得については正社員のみならずパート職員にも励行している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	社外研修については、会社が参加費用を負担している。 社内研修は、月一度の職員会議時にテーマを決め勉強会を行っている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	多治見市社会福祉協議会が主催する「グループホーム職員交流会(3月に1回)」に参加している。また、随時同業他社や医療関係施設を訪問しサービスの質の向上に資するよう情報収集をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入居時は、その方についてのどんな些細な情報も重要です。ご本人のみならずご家族の話を傾聴します。 まさに『きのう、きょう、あした』の介護の原点です。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	申込時、入居契約時、入居後の面談でとにかく懇切丁寧にお話をお聞きます。 信頼関係構築の原点です。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ご本人の状態について、ご家族様は意外と把握していないケースが見られる。入居後、1週間はじっくりとご本人に向き合うことから始めます。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	何はともあれ、ご本人に密着すること。 従来、この点が弱かったと思う。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	ご本人の施設での暮らしをお伝えすると、ご家族が知らなかった面を知ることがあります。このことで、それまで疲弊したご本人とご家族の関係が和らいだりもします。 介護が施設だけでなくご家族の協力も重要なのだということを知っていただく、良い契機になっている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	年々、ご本人様を訪ねてくる友人・知人は減少している。たまに、ご家族が外出に連れ出してくれますので、そうした機会を絶やさないようにご家族にお話している。	毎月発行している便りでは、利用者の日々の様子を伝え、面会の少ない家族には電話で来訪を促し、利用者や家族の関係が途切れないよう働きかけている。家族から馴染みのボランティアの紹介があったり、家族がボランティアとして慰問に訪れることもある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	ホールでの着席位置や行楽時のバスの席順を常に配慮している。利用者様が孤立しないよう、また、対立しないようにしている。 また、挨拶を励行することでお互いを認め合うきっかけ作りをしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	他施設への転居、入院時などはご家族様の了解を得て、施設内での過ごし方などの情報を開示するなどしている。移動先でご本人が混乱しないよう、戸惑わないよう支援している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	認知症介護の要点です。表情・会話・動作のすべてに意味があります。見落とさないよう密着することに努めている。 また、表現が困難な利用者様には、その方の生きざまを参考にしながら人らしく生きる環境づくりに努めている。	入居時のアセスメントや日々の暮らし方、言動、表情などから意向を把握し、利用者が出来る事やしたい事を実践できるよう支援している。また、職員間で情報を共有し、利用者一人ひとりの思いを受け止め、理解するように心がけている。	新しい指針として、「きのう、きょう、あした」「十人十色、十人一色」を常に意識し、職員や家族のさらなる理解と協力を得ながら、介護の指針の定着につながることを期待したい。
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	とくに入居時の情報が重要です。 ご家族との丁寧な面談が基礎になっている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	認知症の主症状とBPSDをしっかりと見極めること。その把握に努め職員間で情報を共有することに努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	利用者ごとに担当者を決めている。 『きのう、きょう、あした』の介護の指針としている。	管理者を中心に、各フロアーの介護支援専門員が介護計画を策定している。日々のケアの中から利用者の状況を把握し、職員間で情報共有を行い、本人や家族の意見を計画に反映させている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	申し送りノートの活用と日勤記録(+夜勤記録)をベースに情報共有に努めている。 月一度の会議では日誌の書き方・表現方法など常に検証している。 『十人十色、十人一色』の介護の基礎です。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	とくに緊急時の対応は柔軟な支援やサービスが求められる。緊急時の職員の対応方法の研修、提携病院との連携も密にしている。		

岐阜県 グループホーム円

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	地域のボランティアの方々、歌の会の人たち、ハロウィン時の子ども会など交流が続いている。近隣の保育園から運動会・学芸会に招待されている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	毎月1回、提携病院の医師による往診を受けている。また、ご本人・ご家族が望む場合は適切な医療をうけられるよう支援している。	契約時に、協力医の往診が月1回あることを家族に説明し、多くの利用者が協力医をかかりつけ医としている。医療機関との連携も円滑で、24時間体制の訪問看護と提携しながら、適切な医療を受けられるよう支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	常勤の看護師を配置している。また、提携病院の看護師との関係も従来通り極めて円滑かつ良好である。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている	提携病院とは良好な関係作りができています。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居契約時に『重度化における医療指針』を示している。また、看護師を常勤配置できたため、昨年から『看取り加算』を算定できるようになり、看取り体制もとれるようになった。	入居時に重度化や終末期の対応について説明をし意向を確認している。状態の変化を早期にとらえ、事業所として可能な限りの支援に取り組み、家族にも協力を依頼している。また、地域の住職には、日頃から事業所の活動について、理解と協力を得ている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時の対応は、毎月の職員全体会議で繰り返し確認している。また、消防署の協力を得て救急救命法などの訓練を実施している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署の指導と市役所の指導で緊急マニュアルを作成し、利用者参加の防災訓練を実施している。また、市からの要請で緊急避難場所としての役割を担っている。	年2回、夜間想定を含む火災・水害等の防災訓練を実施している。避難誘導、連絡網や職員の役割分担を確認し、緊急避難所としての在り方についても具体的に検討を進めている。	今後は、地域の防災訓練にも参加し、災害時において、地域との協力関係の構築に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者様への挨拶、声掛けを徹底するように職員への指導を強めている。	職員は、利用者一人ひとりの人格を尊重し、会話や声かけの際に、自尊心を傷つけないよう努めている。また、排泄や入浴介助においては、羞恥心に配慮し、脱衣所は、プライバシーに配慮した工夫がされている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	とにかく密着しながら、ご本人の意向を見逃さないこと。また、他の職員との情報共有を欠かさないこと。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	もっとも重要な課題です。「主役は利用者様」という視点が極めて重要です。この視点が確立出来れば、最高の介護施設となる。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	ご本人の意向を大切にする。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	利用者とスタッフが一堂に会して食事の時間を過ごしています。	旬の食材を利用し、栄養バランスのとれた献立で、毎食職員が調理して提供している。利用者の好み、咀嚼や嚥下の状態に合わせてアレンジし、安全に美味しく食べられるよう工夫しながら、利用者と共に食している。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	とくに水分補給を欠かさないことに注意して		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	多治見市歯科医師会に相談し、口腔ケアの実地指導を計画している。健康管理の原点として今後は位置付けていきたい		

岐阜県 グループホーム円

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	人として生きる原点としても排泄介助は重要です。常に見守りながら、ご本人様のプライドを傷つけないように配慮し介助することを心がけています。	トイレでの排泄を基本に、個々の排泄パターンに合わせて声掛けや誘導を行い、自立の利用者も増えている。布パンツ利用になった人もあり、排泄用品の軽減にもつながっている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便チェック表を活用している。便秘が続く方は、看護師を介して病院医師との指示を受けて下剤等を処方してもらいます。日常生活の普段から、軽い運動や朝食時にヨーグルトを提供し、腸の健康促進を図っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴の順番等は、できる限り本人の希望に沿う様にしている。又、男性職員も介助にあたる為、同性職員を希望される場合は本人の希望に沿う様変更している。また、機械浴を導入し入浴困難な利用者様にも対応している。	入浴は座位保持能力に注視しながら、利用者にあつた入浴方法で支援し、坐位でも安全に入浴できる特殊浴槽も備えている。入浴は、週2回を基本としているが、利用者の希望を聞きながら、必要に応じて時間や順番を入れ替えて支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	各利用者の体調に合わせ、休息はとって頂くようにしている。夜間安眠できない方には、日中に運動やレクリエーション等を取り入れ、日中と夜間のリズムをつけ安眠に繋げるよう心がけたり、話し相手になり安心して頂くよう支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬の情報は医療ファイルを確認し、全職員が把握できるように努めている。服薬時には、日付や氏名、時間や錠数、確実に口の中に入った事を確認しミスがないよう徹底している。又服薬済み空入れを使用し、再点検を引き継ぎ者がしてミスを見逃さないようにしている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	各利用者がホーム内での生活に生きがいを持てるように、又、本人が得意とされている役割を継続できるよう支援を行っている。利用者様同士楽しく暮らしていただけるように座席を工夫、時に移動する。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	天気の良い日には、主に午前中近隣の公園まで散歩に出掛けたり、ミニ外出としてドライブ、買い物などの外出支援をしている。利用者の希望を取り入れて、春と秋を中心に外食と行楽行事を設けている。	天候や利用者の体調・気分・希望を確認し、散歩をしている。月に一度、外食も取り入れている。年間行事で、行楽地へ出かけ、気分転換を図りながら、メリハリのある生活支援に努めている。また家族の協力で、個人的外出等も実現出来ている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お小遣い程度の金銭を常時あずかっており、その金銭管理はご家族了承の上で職員が行っている。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	家族の了解を得た場合には、できるだけ家族と電話でお話をしてもらっている。また、友人・知人への手紙の交換を支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居間にはソファを置き、居室入り口には暖簾をかけ、利用者がゆったりとした気分で過ごせるようにしている。居間には、1階2階それぞれ壁に季節に合わせた貼り絵やレクリエーションでの個々の作品等を掲出し、居心地の良い空間作りに努めている。	玄関に暖簾が掛けられ、家庭的な雰囲気があり、その先には、いつでも横になれるソファが置いてある。居間は明るく開放的で、窓から近隣の景色が見える。利用者と一緒に作成した折り紙や、椿の花を飾るなど、季節を感じる工夫があちこちにある。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間には、主に食事をするテーブル・椅子やリラククスして頂く為のソファ等も設置し、利用者同士が自由に過ぎて頂けるよう環境を考えている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	各利用者にとってなじみの家具や物があれば居室に配置できるようにしている。又ご家族様の写真等置かれる方もあり、その人らしい「自分の家」になるような空間作りを支援している。	利用者が慣れ親しんだ家具や小物を持ち込み、安心して、その人らしく生活できるよう環境作りに努めている。タンスや小机の上には、家族の写真や行事での写真を飾り、楽しい思い出を振り返ることができ、自分の家として、居心地よく暮らせるよう工夫している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	建物内部はバリアフリー構造で利用者の身体能力に合わせて自立して生活ができるよう環境面で配慮している。生活の中で「出来ない事」よりも「出来る事」を見出し、本人の残存能力や生活の生きがいを保持して頂けるよう努めている。		